



2016. 1. 20

No.193

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送6号分1,000円)

2016 民主主義と立憲主義をとりもどす年に



1.1 勇払郡むかわ町海岸線からの初日の出

2016年も早半月が過ぎました。みなさまはいかがお過ごしでしょうか？

昨年ほど民主主義と立憲主義が踏みにじられた年はなかったと思います。それに対して市民が必死に抵抗した年でもありました。

先日の朝日新聞、折々のことばで「みんな、『戦さになってしまっ』とか、『戦さが起っ』とか云（い）ってるよ。」井上ひさしさんのことばを引いた鷲田清一さんは、戦後何年経っても、「私が戦争をはじめました」と認める人はついにいなかったと作家は言う。気がつけばそんなことになっていた、というのが誰も彼もの言い草だった。「した」ことがいつのまにか「なった」ことへとずらされてしまう。進んで責任を負おうとしないこの習性は、政治家や官僚という以上に、彼らに任せきった私たちのものだと書いています。

戦争になってしまったら、私たちも同じことを言うのでしょうか？ そうはなりたくないです。選挙で3分の2が与党になれば改憲できると、政府は強調しています。改憲は許してはならないです。今年の選挙はとても大事ですね。

昨年は大きな災害もありました。先日は道内各地で震度4～5の地震に慌てました。丁度スーパーで

買い物をしていました。横揺れが長く続き、軽いものでしたが棚から商品が落ちました。帰宅したら本棚から本が散乱していましたが被害がなくて良かったです。福島から道内に避難している人たちはどんなに怖かったでしょう。とても気持ちが理解できました。

昨年の「銀河通信」は安保法案に反対する市民運動に明け暮れた記事が多く、原発問題に触れた記事が少なかったです。泊廃炉訴訟は今年が正念場です。こちら頑張りたいと思います。

6月3日には茨木のり子や、与謝野晶子の詩に曲をつけてピアノで弾き語る吉岡しげ美さんのコンサートを六花亭駅前ビルにあるふきのとうホールで開きます。是非、たくさんの読者と楽しめたらと思います。

母の介護も加わり、なかなか思うように山登りできませんが、今年はもう少したくさんの山に登って鋭気を養いたいと思います。

7月で「銀河通信」が28周年になります。拙い通信ですがもう少し書き続けたいと思っています。引き続きご愛読いただけますようお願いいたします。

一人ひとりが大事にされ、平和で自由に生きられる社会であって欲しいと願っています。

みなさまにとっても良い年でありますように。



2015.12 庭に飛んできたアカゲラ

植村隆さん、韓国カトリック大学へ 「負けるな北星！の会」報告集会



植村隆さん

2015年12月23日、「負けるな北星！の会」の報告集会が愛生館サロンであり、60人の参加で会場はいっぱいになりました。

最初に治安維持法、戦争責任研究で知られる荻野富士夫小樽商科大教授が、「日本の経済活動にとって（ソマリア沖は）生命線」と発言した

中谷元・防衛相などを例に、「生命線」や「国益」を声高に叫び軍事力を増強していった1930年代と現代の相似性を指摘しました。同時期に天皇機関説事件、矢内原忠雄の辞職、河合栄治郎の休職など権力弾圧が起きているとして、北星大脅迫事件を闘い抜く大切さを訴えました。

今年3月、韓国カトリック大への客員教授となる植村隆さんは朴永植（パク・ヨンシク）総長の次の言葉で、同大行きを決意したと述べました。「客員教授に招くのは、あなたのためではない。韓国のためでもない。東アジアの平和のためだ」と。

朴総長は70～80年代、独裁政権と闘った韓国民主化運動の父、故・金寿換（キム・スファン）枢機卿の元秘書でもあります。

植村さんは、北星大、自身、家族に対するこれまでの支援に感謝し、「もし、バッシングを受けず、普通に大学の教授になっていたら、オレは元特派員をやった朝日出身の偉い教授という最もいやな人間になっていただろう。北星の体験を通じ、私も変わった」と振り返りました。

講演の後は、参加者が次々スピーチするパーティーで盛り上がりました。

「創」2016年1月号に元朝日記者 植村隆北星問題決着が詳しく報告されています。元毎日新聞記者の山田寿彦さんが書いています。なんと会場で21冊を売りました。また「世界」2016年2月号に往住嘉文さん、長谷川綾さん共著で「正義のたいまつは引き継がれるか—植村隆氏の闘いから見えてきたもの—」もあります。是非読んでいただけたらと思います。

自分らしく輝いて生きる—室蘭女子会に参加して

2015年12月17～18日、室蘭女子会に参加しました。函館で大間原発反対運動をされ「大間原発と日本の未来」の著者である野村保子さんが企画して下さいました。参加者は6人。

室蘭には室蘭工業大学で憲法学を教える清末愛砂さん、文化人類学の松本ますみさんが在住。そこに札幌から参加の「戦争したくなくてふるえる」の高塚愛鳥さんと下郷紗季さんと私が加わり、17日夕方食事しながら、テーマは決めずに話し合いました。市民運動で直面したさまざまなこと、たとえば、いまだに男性中心で「教えてやる」という態度に怒り、自立して生きる女性たちの闘ってきた人生などが語られました。



2015. 12. 17 室蘭工業大学で

室蘭には鷲別岳（室蘭岳）があるので何度か訪れていますが、街は知りませんでした。

18日、レンタカーで市街を走ると、鉄鋼城下町であることがよく分かりました。住宅は山側にあるんですね。幕西遊廓跡地も見ました。その面影は全く分かりませんでした。ネットで調べたら湯とあった場所もそのひとつだったようです。地球岬や、金屏風の岩など絶景です。風が強くて吹き飛ばされそうでした。写真を撮ろうとしてあっといふ間に手袋が風に飛んでしまいました。

清末さん、松本さんには、授業を終えてからお付き合いいただきました。自立した女性たちの真っ当な意見に刺激をたくさんいただいた2日間でした。



12. 23 清末愛砂さん

戦争法の危険性を語る 清末愛砂さん講演会

12月23日、清末愛砂さん（室蘭工業大学）は、安倍政権は女性の活躍推進は経済貢献や少子化対策としての出産を要求し、強い国家を支える「ナショナリズムを裏付ける政策」だと語りました。

また、夫婦同姓を定めた民法の規定を合憲とした最高裁の判断は「同一の姓が家族の一体感を示すという家族主義が大日本帝国時代からそのまま生きている」と批判しました。

戸籍制度が、いかに戦争体制に結びついているか。清末さんは、家制度は軍国主義、植民地主義を支える手段だったこと。憲法24条には、家庭生活における個人の尊厳と両性の平等が明記されているが、それは戦前、人々が家制度によって、辛い家庭生活を余儀なくされたからだったと話されました。24条には家庭関係で互いに尊重しあう経験が平和な人間関係になるという思いが込められているのですね。

先日判決は、時代に逆行していると思いました。家族を戦争の道具とさせないために、現実にある多様な家族を認めることの大事さを学びました。

帰宅してから憲法本を読み直しました。

「草の根保守の思想と行動」 講演会に参加して

1月5日、モンタナ州立大学の文化人類学者、山口智美さんのお話を聞きました。

草の根保守の実態を調べはじめたのは、2005年頃からでした。フェミニズムを専門にしていたが2000年代から右派からのバックラッシュ（反動、攻撃）が始まったからです。



91年に元慰安婦の金学順さんが名乗り出ました。それを機に慰安婦問題の解決を求める運動が活発になります。それと同時に歴史修正主義の運動も台頭してきます。そういう流れの中で1997年に日本会議ができました。

日本会議はどんな活動をしてきたかと言うと、選択的夫婦別姓や男女共同参画に反対してきました。日本会議にとって家族は大きなテーマだからです。歴史認識と改憲はセットです。

今回一番問題なのは、緊急事態条項です。災害や非常事態時に人権を制限する規定を盛り込んでいます。これはいつでも戒厳令を敷き、言論の自由や報道の自由を奪う絶対に通してはならない条項です。

2番目が24条の改悪。家族の絆、伝統的な家族観が大事にされます。

3番目が9条です。改憲アレルギーが和らぐのを待っている状態です。



介護などいろいろな問題を家族で解決させようとするものです。桜井よしこさんらが、先頭にたって運動を進めています。女性がターゲットにされているのです。

日本会議の北海道支部の運動は非常に活発です。北海道神宮の初もうでで改憲署名が行われました。日本会議の動きには今後も注意が必要です。

安倍政権で右派が急に増えたのではなく、日本会議が少しずつ力を強め、安倍政治で勢いを増した状況が山口さんのお話を聞きながら理解できました。

いくつもの右派グループがあるのも驚きでした。右派は強面の印象をもっていました。山口さんは、普通の市民、いわゆるいい人が多いというのが意外でした。だからこそ怖いとも話されました。

山口さんのすごさは、右派の中に入って話を聞いていることです。定年退職した中高年の人が日常活動を担っているという話もあり「恐るべし右翼！」の感を強くしました。

山口さんのすごさは、右派の中に入って話を聞いていることです。定年退職した中高年の人が日常活動を担っているという話もあり「恐るべし右翼！」の感を強くしました。

今年初の登山は快晴の春香山

今年初の登山は銭函にある目立たないけど美しい名前の春香山です。

1月11日、予報は曇りのち雪でしたが、快晴。山仲間9人でスノーシューで登りました。



登山口を8時半に出発。なだらかな林道を歩き、標高400m付近から急斜面をトラバースして登って行きます。土場を過ぎると視界が開

け、石狩湾が一望できました。銀嶺荘まであとわずかでしたが、春香山がすっきり見えたところで下山することにしました。登山口13:30 登山を終了しました。

氷点下15度の厳しい寒さと、風が強かったです。仲間と雪道を踏みしめ、美しい冬景色を楽しみました。

写真は春香山を見上げる仲間と 土場まで斜面を登る仲間です。



本の出版を祝う会
「繊維女性労働者の生活記録運動 1950年代サークル運動と若者たちの自己育成」

1月15日「みんなる」で北大で社会教育

実践研究をされている辻智子さん（写真）の著書の出版記念祝賀会がありました。10人ほどの小さな集まりでしたがとても楽しかったです。

辻さんが書かれた本は「繊維女性労働者の生活記録運動」です。

学校以外のところで労働運動の中に綴り方運動があったことに驚き、そこから研究を始めたことを語りました。

辻さんは1950年代の生活記録運動を紡績女性労働者サークルに即して明らかにしてきました。私は著書はまだ読んでいませんが、女性労働者たちは何を悩み、書き、考えたのか。紡績工場の労働組合文化活動から生まれたサークル「生活を記録する会」に残されたガリ版刷りの文集や通信、日記などで具体的に記述されていたと言います。書くことで、女性たちは成長し、労働環境を変えていく力になったことが、辻さんのお話から伝わってきました。

辻さんは関係者と信頼関係を築き、繰り返し話を聴き、多くの資料にあたってまとめました。地道な努力の労作に頭が下がります。是非読みたいです。

本 Books

今回は本の紹介が多いので出来るだけ短くまとめました。是非、関心のある本がありましたら手にとって読んで頂けたら幸いです。



わたしの土地から 大地へ

セバスチャン・サルガド+イザベル・フランク著 中野勉訳
河出書房新社 2,400円

報道写真家セバスチャン・サルガド。

彼は移民、貧困、病、紛争…世界中に住まう社会的弱者たちの姿を、そしてこの大地に住まうことの奇蹟を、数年にもわたる密着取材を経て完璧なモノクローム写真として捉えてきました。40年以上に及ぶ輝かしい履歴の背後に隠れた“人間サルガド”の姿を生き生きと伝える自伝。(帯文から)

サルガドは1944年、ブラジルのミナスジョイスの豊かな森に囲まれた農園に生まれ、大学で経済学を学びますが、軍事独裁下のブラジルを脱出し、パリで暮らします。アフリカ各地で経済発展計画に携わりますが、自身にとってのアフリカを見出し、写真家になります。

インディオとともに何カ月も旅をし、モザンビークの難民たちと来る日も歩き続け、累々と屍骸(しい)が重なるルワンダに滞留して心身を壊しながらシャッターを押し続けました。その後、ブラジルの森を再生したり、野生動物にカメラを向けるようになります。

妻との結束、ダウン症の息子への思いと生活ぶりなど、家庭人としての姿も明らかにしていきます。

何故、人々の心を打つ写真なのか、本書を読むと理解できます。サルガドは写真という言葉で私たちに語っています。人や、動物や自然に真摯に向き合うサルガドの世界に惹きこまれました。

昨年、映画「セバスチャン・サルガド 地球へのラブレター」を観ました。写真から伝わってくる人々の尊厳が見事に写しだされていました。ブラジルの金鉱掘り、ルワンダの難民、大規模製造業の手仕事、自然保護区の生態系など、今まで見たことのない写真から彼らの声が聞こえてくるようでした。今回、文章で追体験できました。

14歳 (フォーティーン) 満州開拓村からの帰還

澤地久枝著 集英社新書 700円

澤地さんはあとがきに「14歳の子のために、70年前に14歳であった少女の物語を書こうとした。どんな時代を生きたか、語ってゆこうとした」と書きました。



満州での過酷な体験は兵隊だけではありませんでした。敗戦で、過酷な難民生活が始まり、強姦にあわないために自分で髪を切ります。何の武器も防護策もなく、100万人近くの日本人が満州に置き去りにされました。自宅から知人の家に、そして難民収容所に移ったこと、帰国が決まり、貨車に乗せられ、港から船に乗ったことなどが記されます。

敗戦から2年間の壮絶な暮らしから14歳の少女の目で戦争とは何か、を伝えようとしたのが本書です。

日常を奪う戦争の怖さが胸に迫りました。



暁のシリウス 北嶋節子小説集

北嶋節子著 コールサック社
1,500円

北嶋節子さんは37年間小学校教師として勤務され、定年退職後は自らの体験に基づいた小説を多数発表されています。

ひとりひとりの子どもを大切にパステルチームの教師たちが奮闘します。在日中国人少年と一家の深い傷を教師たちは受け止めます。教育と社会のあり方を問う物語。「陽だまりの小径」併録。

教師集団が分断されようとしている学校現場でパステルチームと児童、父母が一体になって、素晴らしい卒業式をつくりあげる場面は思わず泣けてしまいました。

権力が教育現場に介入し、歴史修正主義のごり押しや「君が代」強制問題など、危険な動きが進行しています。安倍政権の言論の自由への侵害は目に余ります。教育現場で奮闘する教師集団があることに励まされました。詩人の佐伯憲一さんは「人間とは何か、子どもたちはどんな様子と内面なのか、社会とはどうあるべきか、といった極めて根源的なところまで深く問いかける内容になっている」と評しています。

右傾化する日本政治

中野晃一著 岩波新書 780円

日本の右傾化のポイントは3つです。1つ目は右傾化は社会主導ではなく政治主導であること。2つ目は、何回かの揺り戻しを経ながら徐々に進んでいること。3つ目は旧来の右派が勢力を伸ばしたというよりは、新自由主義と国家主義が結合した新右派がその中心となっていることを本書で明らかにしています。

新右派連合に歯止めをかけるには、民主主義の原点に立ち戻り、小選挙区制度の廃止、リベラル勢力が新自由主義と決別すること。左派リベラルが自由化、多様化をいっそう進める必要があると述べています。今年の選挙は、憲法改悪させるかどうかの瀬戸際です。「負けられない闘いははじまっている」のことに集約されていると思いました。





北海道の守り方
 グローバリゼーションという
 <経済戦争>に抗する10の
 戦略
 久田徳二編著 北海道農業ジャー
 ナリストの会監修
 寿郎社1,400円

グローバリゼーションから具体的に北海道と日本を守るには、何をしたらよいか。2015年3月に「TPP問題を考える道民会議」と「TPPを考える市民の会」が開催した道民集会の参加者らが論じています。

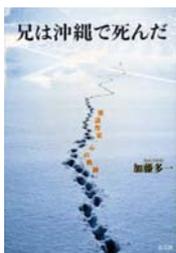
CSA（地域が支える農業）を展開する長沼町の取り組みを紹介。大きな特徴は、農家が再生産可能な費用と所得を会員全体で拠出する点です。そうすることで農家は安心して農作物をつくることができます。会員は生産者の顔が見え、安心できる野菜を食べることができます。

TPPに参加したら、豊かな大地を失う日が来るかもしれません。日本の医療も崩壊します。自由診療が増えて、安心して受けられる国民皆保険が崩れてしまいます。

TPPへの不安から希望に変えるのが本書「北海道の守り方」です。

兄は沖縄で死んだ
 童話作家・心の軌跡

加藤多一著
 高文研
 1,600円



加藤さんが1993年以来7回沖縄を訪ねて戦跡を歩き、沖縄戦の体験者はじめ、さまざまの分野で活動する人々との出会いを重ねて、沖縄への認識深めていったルポルタージュです。2015年には3回訪ねています。

摩文仁の丘に立ち並ぶ各県の慰霊碑を見て、加藤さんは怒ります。碑文には「美文」が氾濫し、用語もアジア諸国の人々への視点を欠いた「大東亜戦争」の呼称を使い県知事名が仰々しく刻まれている。これは「慰霊碑」ではなく「顕彰碑」ではないかと。

加藤さんは10人兄弟の4男として網走管内の滝上に生まれました。7歳の時に次兄輝一（こういち）さんが20歳で出征。沖縄で戦死しました。

どこで、どのように戦死させられたのか。沖縄でさまざまな人と出会い検証しています。

読谷や伊江島を訪ね、辺野古の座り込み現場にも行きました。そこで沖縄戦から切れ目なく続く沖縄の現実を全身で受け止める加藤さんの心の軌跡が描かれます。そして行きついた天皇制問題の本質が、国民の「思考停止装置」にあると悟るのです。

加藤さんはあとがきで「死者の無念さを長く語り伝えるかぎり『命の論理』はいずれ『戦争の論理』に勝つのだー私は老骨の深いところで信じている」と締めくくっています。

兄の戦死を通して沖縄を見つめ、今も戦前状態に置かれている沖縄の人々への共感が貫かれていて、被害者にも加害者にもなりうる戦争の残酷さを直視しています。



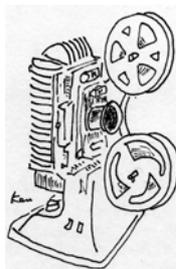
**日本山岳会 北海道支部
 50年のあゆみ**

日本山岳会北海道支部発刊
 1,200円（送料含む）

私が日本山岳会の会員になって15年になります。改めて先人が道をつけてきた支部の歴史をふりかえる記念本になりました。

記念誌編集に私もささやかですが関わりました。この本から支部消滅を乗り越えてきた軌跡を知ることができます。膨大な量の支部通信や登山史などの記録をひもといてまとめました。本の表紙は会員であり版画家の渋谷正己さんです。2007年にカミホコの雪崩事故で4人の仲間を失いました。その検証も記されています。私の自然保護運動との関わりや、支部通信編集に2年半担当した足跡も記されています。多彩な顔ぶれの寄稿文も素晴らしいです。是非お読みいただけたらと思います。問い合わせは編集代表長谷川雄助さん090-6266-3365又は6726mnsq@jcom.home.ne.jpへ。

2015年に86本の映画を観ました。洋画が多いですが私の映画ベスト10です。



- 1.セバスチャン・サルガド
 - 2.パレードへようこそ
 - 3.黄金のアデーレ
 - 4.あん
 - 5.妻への家路
 - 6.何を怖れる
 - 7.首相官邸前で
 - 8.沖縄うりずんの海
 - 9.海街diary
 - 10.きみはいい子
- 次点Mommy



黄金のアデーレ
 名画の帰還

アメリカ・イギリス
 合作 サイモン・カー
 ティス監督

クリムトが描いた「黄金のアデーレ」返還要求は世界中を驚かせました。

1999年、アメリカ在住のマリアは、オーストリアの美術館にある叔母アデーレの肖像画の返還をオーストリア政府に求めます。なりたての若い弁護士ランドルが奮闘しますが、審理は却下。

ランドルは、最初は金儲けができるのではと思っていたのに、オーストリア政府に敗訴して、ナチスによって命を奪われた祖父の悔しさやマリアの思いに初めて気が付きます。

戦時中、ユダヤ人のマリアは、ウィーンから夫と共にアメリカに逃げ延びました。しかし、マリアは家族と財産の全てを失いました。作曲家だったランドルの祖父も強制収容所で亡くなっていました。「過去の記憶を忘れたくない」というマリアに、ランドルは次第に絵の返還は「人間の誇りを取り戻すことだ」と、膨大な資料を読み込みアメリカの裁判所で返還訴訟を起こすのです。

マリアは「アデーレ」の返還とユダヤ人迫害という歴史事実への謝罪を政府に要求したのです。マリアの生きた過去と現在を交錯させながら描き

忘れてはならない歴史の記憶を私たちに訴えます。勝ち目がないと言われた裁判の勝利でした。「黄金のアデーレ」はニューヨークの美術館にあるそうです。数奇な運命をたどった名画、機会があったら観たいです。

泊原発の廃炉訴訟もこうなって欲しいな。



顔のないヒトラーたち

ドイツ ジュリオ・リッチャレツリ監督

年末に観た「ヒトラー暗殺、13分の誤算」を観て映画に描かれた史実と、今の状況がとても似てきているのを感じました。かけがえのない自由を奪われてはならないと強く思いました。紙面があまりないので現在上映中の「顔のないヒトラーたち」を紹介します。

ドイツのメルケル首相は、2015年1月にナチス虐殺の被害者の追悼式典で「ナチスは、ユダヤへの虐殺によって人間の文明を否定し、その象徴がアウシュヴィッツです。私たちドイツ人は、恥の気持ちでいっぱいです。何百万人もの人たちを殺害した犯罪を見てみぬふりをしたのはドイツ人自身だったからです。私たちドイツ人は過去を記憶していく責任があります。」と素晴らしいスピーチをしました。

ドイツ人のナチスドイツに対する歴史認識を大きく変えたとされる1963年のアウシュヴィッツ裁判を題材に、真実を求めて奔走する若き検事の闘いを描いた物語です。

戦後13年のドイツでは戦争犯罪を見つめようとする姿勢はまだなかったようです。そのころの20代の若者が、アウシュヴィッツは知らないと答えるのに驚きました。今の日本でも南京虐殺や、従軍慰安婦を知らないというのとよく似ています。

新米検事のヨハンは、新聞記者から「元ナチの親衛隊員が教員をやってるんだ、こんなこと許されていいの?!」と情報を寄せられます。戦後の経済復興が進むさなか、戦時下のナチス・ドイツが、アウシュヴィッツで、どのようなことをしたのかは、ほとんど闇の中でした。ナチスの残党として生き残った多くのドイツ人は、沈黙し、犯した罪を忘れようとしていました。そんな中ヨハンは、様々な圧力にさらされながらも、収容所を生き延びた人々の証言や実証をもとに、ナチスドイツが犯した罪を明らかにしていきます。ユダヤ人として強制収容所にいた検事総長ハウアのもとで5年の歳月をかけて初公判が開かれました。

「ハンナ・アーレント」でハンナはナチスの戦犯アイヒマンの裁判を傍聴して、人間の中に「悪の陳腐さ」を見ました。諸悪の根源は、人間が思考を停止し、悪や暴力、大量殺人を生むことにあるのだと訴えました。この映画でも、アウシュヴィッツで残虐な行為をした人とは思えないほど普通の市民として、パン職人や教師として生きていました。その事実が不気味で怖かったです。

ハンスらの地道な検証があってドイツの歴史認識を変えたのです。過去を記憶することがどんなに大事なことか。地味な映画でしたが、大きな感動をもらいました。監督は俳優でもあり、この作品が長編デビュー作。素晴らしい作品でした。

わたしはマララ

アメリカ ディビス・グッゲンハイム監督



「一人の子ども、一人の教師、一冊の本、一本のペンが世界を変えるのです」と力強く訴えたマララ・ユスフザイさんは、昨年17歳でノーベル平和賞を受賞しました。

この映画はマララの素顔と人間像に迫ったドキュメンタリーです。

マララは、2012年にパキスタンでイスラム武装勢力のタリバンに、頭部を撃たれ重傷を負いました。世界に衝撃を与えたこの事件を中心に、マララの生い立ちや父が彼女の名に込めた想いを明かし、普通の少女がなぜ教育活動家としての道を歩むことになったのかが描かれます。パキスタンでの撮影ができない部分をアニメの映像に、マララが語るのもユニークでした。

テロが恐いと、暴力で封じ込めようとする風潮がある中で、非暴力で世界を変えようとしている少女マララに心揺さぶられました。教育の大切さを発信し続ける使命をマララは与えられたのだと思いました。

戦乱と貧困の絶えない世界で、マララは希望の星です。マララの行動が、私たちは何をすべきなのかを教えてくださいました。



きみはいい子

呉美保 (オ・ミボ) 監督

そのみにて光り輝く」でモントリオール世界映画祭の最

優秀監督賞を受賞した呉美保監督が、中脇初枝の同名短編小説集を映画化しました。昨年7月に観た映画です。

子どもたちや彼らに関わる大人たちが抱える現代社会の問題を通して、人が人を愛することの大切さを描き出します。

ドラマチックな展開はありません。カメラは後姿をとらえて、一歩引いた視点で捉えます。3つの同時進行の物語は、わずかな接点をもちながら並行的に描かれます。

「誰かに抱きしめられてください」という宿題の答えを聞くシーンでは、リハーサルもなく、ドキュメンタリーのように撮っています。子どもを大切にしたら、世界が平和になると感じさせて秀逸。

購読料とカンパをありがとうございます (敬称略) 2015.11.27~2016.1.14

赤坂京子 (札幌市) 富澤克禮 (小平市) 豊村みどり (札幌市) 齊藤淳子 (札幌市) 川原茂雄 (札幌市) 新妻徹 (札幌市) 吉根由紀子 (札幌市) 伊藤誠一 (札幌市) 高野ケイ (札幌市) 伊藤泰弘 (札幌市) 佐々木純一 (雨竜町) 合計17,000円は印刷と送料に使わせて頂きます。今年もご愛読いただけますようお願いいたします。